

INTERVIEW

奥多摩町国民健康保険 奥多摩病院 院長
井上大輔先生



奥多摩から、 地域医療の豊かさを発信。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

奥多摩町との出会い

山田隆司(聞き手) 今日には奥多摩病院に院長の井上大輔先生をお訪ねしました。私も東京にいながら奥多摩に来たのは初めてだったのですが、電車で進んでくるうち、ちょうど紅葉も色づいていて、まるで自分の故郷の岐阜県にいるような錯覚に陥りました。

先生が奥多摩で頑張っているのは以前から承知していましたが、4月から院長職に就かれて、この病院や地域のことを率先して導く立場になられたということで、改めてそういったこともお伺いできたらと思います。

まずは、先生のこれまでの経歴を紹介していただけますか。

井上大輔 自分の発言に先立って、本当に私のよう

なものに声をかけてくださってありがとうございます。お話しするような何か成果のようなものをまだ出せているわけではなく、あくまで地域医療を志す、完成させていく過程の1つをお見せするというようなお話になってしまいますが、よろしくお願いいたします。

私は平成14年に自治医科大学を卒業した25期生です。同年4月から東京都の衛生局に入庁し、そこから3年間は東京都立広尾病院で研修を行いました。最初の2年間はスーパーローテーションでまわりました。当時はへき地に行くにしてもやはり自分が自信をもってできる専門科を持つべきだという考え方をされる先輩方が多く、私のまわりも3年目は専門研修ができるの

で、自分で志したい専門科をまわる方が多かったのですが、私は特にやりたい専門科も見つからず、やはり島に行くことを考えていろいろ勉強しようと思い、3年目も都立病院で1科あたり2～3ヵ月のローテーションを続けました。外科系と内科系の両方の当直をさせていただいて、4年目から島に出ました。平成17年に新島村国保診療所に1年間勤務しました。そこは医師3名体制でした。平成18年は利島村国保診療所で、人口300人ほどに対し医師1人の診療所でした。

平成19年度に奥多摩町に1年間、義務年限医として派遣されることになり、これが一つのきっかけとなりました。実は私は平成19年度は後期研修を東京都に戻ってする予定だったのですが、奥多摩町に赴任する予定だった医師が突然赴任できなくなり、代わりに私が後期研修ではなく奥多摩町に1年間勤務させていただくという形になりました。

その時の院長先生が前年度中に急病で倒れられてしまって、その後も週に何日か診療に来てくださってはいましたが、院長以外は日本医大から派遣の整形外科の先生と私の2人という結構大変な体制でした。7月から新しい院長先生が来てくださって、3人体制になって、そこからは比較的安定した勤務で1年を終えました。

その1年間でいろいろ考えて、地域医療をライフワークにしたいと思うようになりました。しかも自分が今まで知らなかった東京の奥多摩町というところに、こんなに地域医療にいいフィールドがあるんだということを痛感し、これからは奥多摩町に目を向けた医療をしていきたいと思うようになりました。

山田 ほかの地域を訪問しても卒業生から同じような話を聞くことがあります。予期せぬ赴任であったり、辞めるに辞められない状況が続いたりして、でもそんなプレッシャーの中でこそ生き残ったことで、みんなに頼られてやりがいを感じる

ようになったと。

井上 若い感性の豊かな時期にしたそういう体験はものすごく大きいというのを強く感じました。自分が今の年代で同じ体験をしても、多分そこまで思えなかったのではないかと思います。

そこで、奥多摩町に目を向けようと思って考えたのが、認知症や精神疾患を診るためには自分は精神科の研修が足りないと感じ、精神科を勉強しようと思ったこと。それから奥多摩町がある西多摩地区には青梅市立総合病院が中核病院としてありますが、西多摩医療圏40万人で唯一の三次救急医療機関のため患者が集中し、救急が非常に大変だということを知っていたので、青梅総合の救急支援ができるように、救急の勉強もし直そうと思ったことです。

そこで精神科の勉強と救急の勉強をするために、平成20年度に都立墨東病院の神経科で9ヵ月、救命救急センターで3ヵ月お世話になりました。平成21年度は自分の生まれ育った広尾病院の救急診療科と救命救急センターで1年勉強させていただきました。

義務の9年目には青ヶ島という人口170人ぐらいの非常に小さな島の診療所で1年間勤務させていただいて、義務年限を終了しました。

私自身は、義務明け後すぐにも奥多摩町に行きたかったのですが、行政職を助けてほしいというお話があり、1年間、東京都福祉保健局の救急災害医療課に勤務することになりました。

行政職として勉強になったことがあって、それはぜひお伝えしたいのですが、東京都庁の職員は非常によく働いて、われわれのことを支えていてくれるのだということをもっと実感をしたということが1つ。もう1つは、創造性のある行政官は社会を動かしているということに気づかされたということ。何か問題が起きた場合に、過去の事例からできる方法を探そうとする人というのは、本当に素晴らしい仕事をされているので、行政官の人をいかに味方に